

私はメキシコにおける2年間の滞在の間に、都合70回に亘り、関係者に、活動概況、社会情勢、旅行記、私見などを、「ボラッチョ・ボニートのメキシコ便り」と称して、関係者に送付してきた。

以下はこの度の、「NTTOBSV 会」HP 開設にあたり、その内のいくつかを抜粋して送付させていただきます。偏見と独断があるかもしれませんがお許しを願いたいと思います。

「着任の挨拶を兼ねて」

当地の新聞を時々町のキオスコで買って読んでいるが(20~30ページぐらいで日本円で110円程度)、本日朝刊(木曜日)に経済面に東京証券取引場の混乱が大きく出ていた。見出しを見たときは日本経済が突如沈没したのではないかと思ったほどである。

日本の記事はあまり出ないがこれだけ大きく出たのを見たのは初めてである。また鯨の問題でドイツの日本大使館へ抗議活動があったという記事もあった。

仕事は、職場全体のトップが40才前半の女性、所属する部門のトップ(部長)も彼女と同年代の女性、私に直接職場内のことを教えてくれる人も30歳前後の女性(英語、フランス語、ポルトガル語をしゃべる)

(全部不確かなのは年齢を確かめるのは失礼という日本紳士の掟を守っているからである)

比較的女性が多く、今まで技術系の男の職場ばかり経験してきたものにとってはちょっと戸惑いを感じるうえ、朝晩の挨拶は彼ら、彼女らは必ずほっぺたをくっつけて「ちゅっ」と音を立てて挨拶しているが、私には握手だけという寂しさはある。

まだ着任して間がないということと、外国人という考え? 60歳過ぎの老人? という考えなのかどうかはわからないが、私が今後どの程度職場に入り込めるかのテストにもなると思う。

仕事は有り余るほど依頼されたので、私はあくまでボランティアで、主役はあなたたちだと間接的に拒否しているが、そうは言っても私の性格から相当なものは引き受けてしまうかもしれません。

これではボランティア活動でなく、正式の JICA 派遣の専門家のような仕事になってしまうという愚痴も出そうである。これから何が始まるかわからないが、「ボラッチョ・ボニートのメキシコ便り」として、またおいおい連絡します。

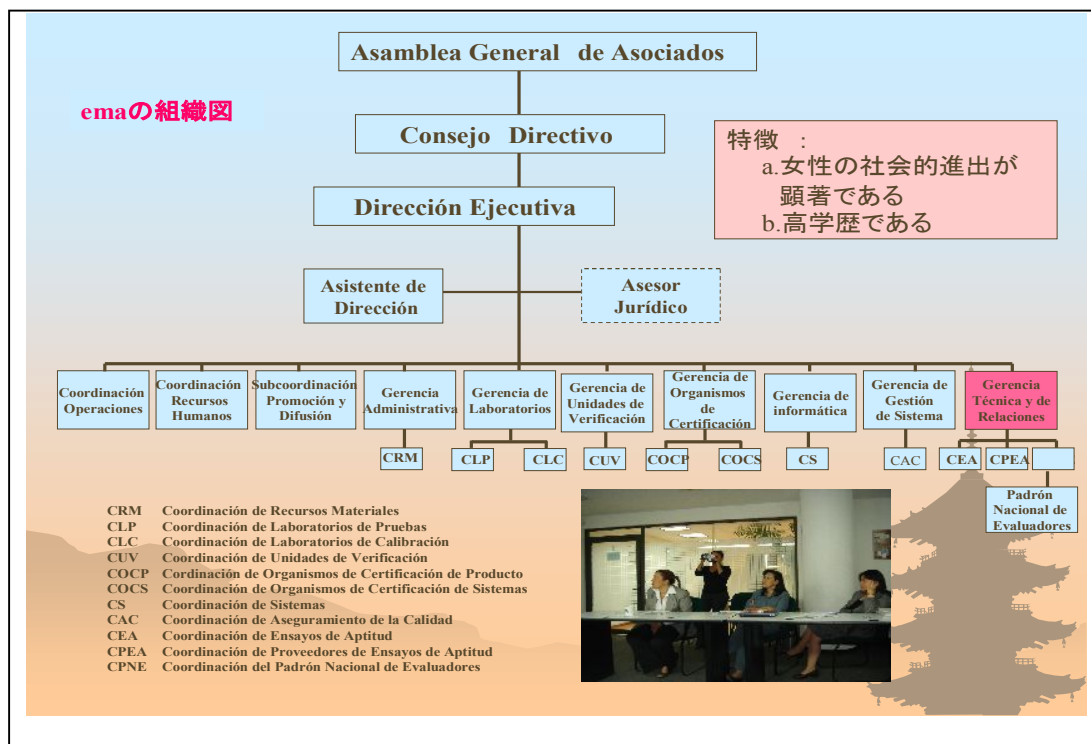
(No.1) (現地時間 2006年1月19日)

*ボラッチョ・ボニートとはスペイン語で「良き酔っ払い」のことです

参考

- 1)派遣期間 : 平成 17 年 11 月 10 日~平成 19 年 11 月 9 日
- 2)指導科目 : 標準規格認定(ISO)・・・ISO 普及活動と品質管理体制構築
- 3)派遣機関 : メキシコ適合性認定協会 (entidad mexicana de acreditación) (ema)
- 4)組織など :





「角を折って雄牛をつかむ」

・・・仕事始め・・・

ボラッチョ・ボニート氏は、先日「角を折って雄牛をつかんだのである」と書くと、判じ物のようで何を言い出したか分からず、とうとう彼も精神的に異常をきたして来たのかななどと思わないでいただきたい。

日本語では、「角を折る」という言葉に似ても非なる言葉として、「角(つの)を出す」などという怖い言葉があったり、「角(かど)を出す」と読むと別の世界になる)、角を出さないように、「角隠し」という言葉もあるが、これら両者と題名の角とは、片方は鬼で、片方は雄牛で角の種類も違いまったく関係がなく、したがって意味も違ってくる。

題名の前半の元になっているのは、「**romperse los cuernos**」(ロンペールセ ロス クエルノスと発音し、直訳すると角を折るで、意味的には大変努力する、一生懸命頑張るの意である)。ああ日本語にも似たような意味で、「骨を折る」などがあったなと思い出した。角より骨のほうが何となく重厚な感じがすると思いませんか。

後半は、「**agarrar el toro por los cuernos**」(アガラヘル エル トロ ポル ロス クエルノスと発音し、特にラ〜のところは舌を強く震わす。直訳的には角をもって雄牛をつかむで、意味的には困難に正面から立ち向かうという意である)

両者とも角に関してのは発想が面白い。したがって、題名は両者を少しずつ借りてきて折衷したものだが、前書きが非常に長くなり気を持たせてしまった割には、今回の報告はきわめて個人的なことである。

ボラッチョ・ボニート氏は何と、メキシコの ISO の総本山で、勤め先でもあるメキシコ認定協会のトップである専務理事以下、部長級幹部の方に対して、しかも我々ボランティア活動に従事している者達が、日頃お世話になっている、地元 JICA 事務所の関係者も出席の上で、「ISO と品質管理」と題して、オリエンテーションを、もちろんスペイン語で行ったのである。

「行ったのである」と書くと、能動的で自分の意思で実施したようになってしまうので、今回の場合は、「行わされた」と受動的に書くのが正解であろう。

最初この話が1ヶ月前ほどにあったとき、目的もあまりはっきりせず、専務理事へ20～30分程度の簡単な日常活動報告かと思ってあまり深くは考えていなかったのだが、最終的に日程と時間と参加メンバーを、一方的に通知されたときには、残りは半月程度であった。

この段階にいたり、当配属先は今まで日本人はいなくて、私が最初であるので、これはひょっとして、私に対する評価定めではないかと感じ始めた。いわゆる「お手並み拝見」というやつである。

本来なら着任後3、4ヶ月ではまだ右も左も分からず右往左往している時期であり、しかも ISO の専門機関の幹部連中に ISO の話をせよというのは、何か意図があるのではないかと ISO 的思考で考え、これはただならぬことだわいと悟ったのだ。

当時作りかけていた ISO の実務的な指導書を私用して、報告に変えようとしていたが、それではあまりにも初歩的で、かつ実務的過ぎて幹部向きではなく、これでもって実施の暁には鼎の軽重を問われかねないので、全面的に資料として作り直すことに方針を変えたのである。

ここからは時間との戦いであった。軍歌で歌われている、「月月火水木金金」の生活が始まった。資料は殆どないため、頭の隅にバラバラと残っている断片的な過去の知識を拾い集めて整理し、時にはアメリカの雑誌社や ISO 本部のインターネットに潜りこみ、難しい英語と数字を拾い読みして、それをスペイン語に翻訳しエクセルで集計し直し、パワーポイントに作りかえるという、頭の思考回路が切れそうな作業を行ったのである。

従って、パソコンに入っている世界一大金持ちのビル・ゲーツ氏の会社の、基本ソフトを一通り使ったことになり、しかも資料の中で、「ISO の位置づけ」と「デ ファクト スタandard」の説明の中に、彼の会社のソフト名を入れたりしたため、彼へのさらなる資産形成の一助に貢献したかも？

冗談はさておき、さて、当日である。2時間近くの口頭試問的な緊張の中で、日本の代表であり、大げさに言えば国の名誉を傷つけないとの思いで喋り、時には質問等があったりしたので終わった後には、さすがに虚脱感に襲われぐったりとなりましたね。

途中持参していたペットボトルの水を何回か飲みました。スペイン語では、「**bautismo de fuego**」(バウティスモ デ フェゴ) (砲火の洗礼、いわゆる初陣)という言葉があるが、新入生のウブを通り越した相当な老トルであるボラッチョ・ボニート氏もこのような心境であった。



しかし残念だったのは、せっかく多く喋ろうとして説明用パワーポイント32こま以外に、カンニング用として、A4 版約11枚の原稿を作っていたにもかかわらず、下ばかり見て原稿を読んでいたのではそれこそ話にはならないので、もう破れかぶれの心境で原稿などは殆ど読まないで説明したので、書いてあること、言いたいことの三分の一程度しか話していないことである。

従って、結果的に評価はどう下ったかは分からない。「何だ！たいしたことはないな」と感じたか、「意外とやるわい」と感じてくれたかは彼女らの胸先三寸(出席者が女性だから頭というほうが問題ないか)のことなので不明であるが、私にとってはそれこそ、「大変努力して、困難に正面から立ち向かった」という表題に帰結したのである。

さて最後にまたまた余談だが写真を見て、ハレーションを起こしかかっているほど、自分の頭の毛がこんなに薄いとは、これまた、二重のショックであった。

ボラッチョ・ボニート氏も年をとってきたなあ。この1カ月ほどで相当薄さの加速度を増したに違いない。

(No.9) (2006年4月23日)

「悟り良ければ短い言葉」

・・・始めに言葉ありき・・・

別の項で、ボランティア活動生活の一端を紹介するが、講義に先立って、まず日本では絶対口にしない、タイトルに記した諺、「**Al buen entendedor, pocas palabras basta**」(アル ブエン エンテンデドール ポカス パラブラス バスタ と発音し、直訳的には悟りの良い人は短い言葉で充分だ、すなわち日本語の諺では、一を聞いて十を知るに相当する)を冒頭に話して、聴講者に理解を求めている。

細かいニュアンスを伝えるにくいところは、相手側で理解してもらおうという魂胆である。一人や二人の隣の位置が少しばかり横にずれていて、コメントなど侮辱的なことを書く人もいるが、大半の人はこの意図を理解してくれている(と思っている)。

脳細胞が大幅に枯渇を始めた年を過ぎて、辞書を頼りに、文法書とカセットレコードだけで、後天的に覚え始めた外国語では、言いたいことないしは自分の意思を、100%完全に伝えることは不可能だと、自分を勝手に納得させている。

日常生活において、とにもかくにも人々と意志を疎通させ、自分自身の存在感を出させるのには、スペイン語は外国の言葉だと言う当然の思いと、相手に密かにタイトルの意味しているところを期待して、まず喋ってみる努力しかない。すなわち、「始めに言(ことば)があった。言は神と共にあった。言は神であつ



た。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。言の内に命があった・・・。」(新約聖書・ヨハネ傳福音書)

と述べられているごとく、「始めに言葉ありき」だと思ふ。下手は下手なりに、稚拙な言葉でも出来るだけ喋ってみることだと、今は開き直っている。

そういえば、「スペイン語は神と喋る言葉」だと教えられたことを思い出した。さらに続く、「フランス語は、恋人と喋る言葉、英語は・・・、ドイツ語は・・・」。「・・・」の所に入る言葉を私は教えられたが、これらの言語を喋る人たちの名誉のために、種は明かさない。

聞きたい人は私に密かに連絡してください。そっと教えます。(ˆoˆ) ちなみに、彼らの語る言葉を再現すると、上記のほか、イタリア語は歌を歌う言葉、言い表すにはギリシャ語などと続くのであるが、日本語は最後まで出てこなかった。何を連想するだろうか。

まさかそれを教えられていた当時流行っていた、「エコノミック・アニマル」などの言葉が出かかって、口をつぐんでしまったのかも？スペイン語は、前述の「神と語る言葉」が多数派であったが、人によっては、ジョークなのか、「神」に変わって、「恋人」とフランス語にとって変える人もいたり、欲張ってさらに輪をかけて、「神と恋人」などという人もいた。ラテン民族の故か・・・

中南米の人は、こちらが少しでも喋るとなると、見知らぬ人でも必ず、「何処で勉強したのか」、「発音が上手だ」などと言いながら次から次へと質問をぶつけて来る。文字通りタイトルの通りに自然体で接してくれるのである。

最初の頃は心の中では、「ほっといてくれ」と若干うっとうしさを感じたものだったが、そのうちに、観光地でのツアーなどに参加すると、初めて会ったにもかかわらず、いつの間にか永年付き合った友達のようになったりして、「私もやっと地域社会から受け入れられたのかな」などと、安堵の胸を撫で下ろしようになった。私は諺などは出来る限り暗記するように心がけていた。

この勉強方法が語学上達の鍵となるかどうかは、不明であるが、時には、大いに役立ったこともあったと思う。友人たちと話しあっている時、下手なスペイン語でとつとつと喋っていたのが、突然その部分だけ、スラスラと異質とも思える名文句が出てきたりして、相手はそのアンバランスさにさぞかし驚いたことだろう。

問題は会議や講義などの時である。私は自分の性格として、会議などでは人を徹底して打ち負かすほどの饒舌さと、心の狭量さを持ちあわせてはいない。まして外国語においては、なおさら饒舌なんては絶対的に有り得ない。

前もって考えられる想定問答や発言要旨をスペイン語で作りと、それらを暗記したりして会議などに出席するのだが、専門分野の区分が日本とも異なるせいもあって、中南米人は時には考えられない発想の質問をする。

二度・三度質問の意味を問い返しても、なかなか相手が言わんとしている意味が分からなかったり、たとえ意味が分かったとしても、その時にはすでに言語中枢と、舌の運動神経と情緒を司る中枢が回路的にショート状態に陥っている。

問いを発した側は答えを黙って待っているが、私の方はといえば頭の中は大混乱を起こし、パニックを呈し

て沸騰状態で熱くなっている。

文を組み立てようとして幾つかの単語を探してみても、頭の中が混乱するばかりで文章の体をなさない。

片数の多いジグソーパズルの一片一片と格闘しているようなもので、外観は口だけは何かを喋ろうとして、水槽の中の酸素不足の金魚のように、パクパクと動かしているだけだ。この様な結果に陥った

時はなんと後味の悪いことよ。寝床に入っても、あの時はああ言えば良かった、こう言えばもっと良かった、こんな単語なんかも知っていたではないか・・・等と後になればなるほど、頭の中に色々な場面が浮かび上がって、寝つきの悪いことおびただしい。

自分を責めないで過ごすことを学ぶのは、何回も遭遇したのに学習効果はさっぱり出ない。にわか勉強の付け焼き刃では、いずれすぐにぼろが出てくると言う証拠を認識したのだった。

外国語に強いと言うのは、当然のことながら、母国語を充分喋れた上でさらに外国語を喋れると言うことであって、単に外国語を流暢に喋れるだけで母国語がおろそかでは、その人は相手の国の人その者でしかないだろうと思う。

その両方がおぼつかない上、近頃は2つばかり単語を暗記すると、3つぐらい忘れてしまうので、差引勘定は常に赤字である。つまりこの年での語学は、上達は不可能だという諦めの境地に達してしまったのである。何時までも、タイトルに採用した言葉を言い訳として続けるわけにはいかず、また述べなくて良い日が来ることを期待しつつ、飲んでいながらあるなら、単語の一つでも覚えろという、内なる心の叫びにちょっぴり引かれながらも、ボラッチョ・ボニート氏は、またまたテキーラの杯を重ねるのであった。

しかるに、スペイン語の世界を知ったおかげで、大多数の人が経験出来ない仕事をさせていただいたと言う気持や、スペイン語は20カ国強で公用語として使われているので、「一挙両得」どころか、「一挙二拾得」とも言える、得をした気分になったと、秘かに感ずるようになってきたことも確かである。

この経験は何物にも変えることが出来ない貴重なものであろう。この様な貴重な経験をさせていただいた、関係者の皆さんや家族に感謝する次第である。

(No.52) (2007年5月20日、世界の美女が民族衣装を着て競った日に)



ある地域での講義活動の一コマ

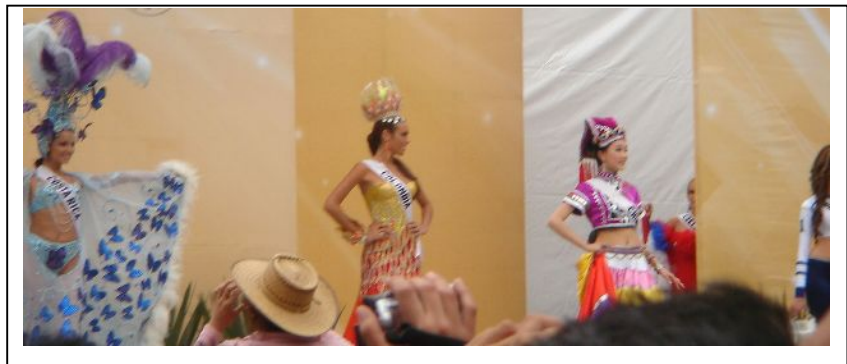
「番外編」

独立記念塔の前で開かれた、屋外での「各国のミスユニバーサスたちの民族衣装コンクール」
日本代表のキモノスタイル(着物と書くよりもキモノと書いたほうが合う感じの現在風衣装でした)

このあたりから雨が少し降り始めました。



二輪車で警備中の婦人警官



「学問に王道なし」

外国で生活していく上で分かったことは、一旅行者としての身分と異なり、日常の談笑やパーティーの席上などでは、日本についてしっかりと伝えなければならない立場に、しばしば立たされるという事実である。

外国人と深く交流するには、自分の専門分野ばかりに詳しい専門馬鹿ではなく、自国の文化に関する造詣もある程度持つ、オールラウンドプレイヤーたる必要があると思っている。

そこから次の対話が成り立ってくるものだが、意外に自分が日本に関する“正確な知識”を持っていないことを知らされる。我々が外国人と話をする時に一番弱いのは、多様な話題に乏しいことであり、文化、自身の生き方や人生、あるいは物事の本質などをきちんと伝える能力の点であると思った。

当地では、ボランティア活動という制約から、日本人と現地の人との公式的な行事への参加などは、配属先関係を除いてあまり及びでなく、従って過去の話になりがちであるが、日本人の仲間内では、社会的地位もあり、仕事や経済の話になるとそれ相応に饒舌に喋る人でも、外国人の交じったパーティー等での社交の場になると、途端に寡黙になったり、あるいは日本人同士で固まって、ゴルフや仕事、時には戦果を誇るかのごとく女性の話しかかない人も結構いた。

時には、会話の輪の中に外国人が一人や二人交じって居ようがおかまいなく、平気で日本語で喋っている人もいる。ひょっとして、彼の外国人は、「彼らは何の話をしているのだろうか？」と気をもんで、心の中でいらついていたに違いない。

貧弱な会話の内容は、その人の過去における社会生活の軌跡が、会社内的人間だけの単線的であることを表していると思う。日本語で知らないことは、もちろん外国語で話せるわけではない。話したいことが無ければ会話は生まれず、外国人の様々な話題、あるいは適当なジョークやユーモアを混じえた話から、一人阻害されることになる。今回のタイトルに採用した、

「**No hay atajo sin trabajo**」(ノ アイ アタッホ シン トラバッホ と発音し、直訳は努力なしの近道はなしと言う意味で、意味的には学問には王道なし)という、昔から言い伝えられている諺がある。

学問すべてに真理の一面を現しているかもしれないが、一方では、「日本は国家事業として英語に膨大な投資をしていながら、世界に通じるという点からみれば、全くの無駄をしている」(大前研一著、「遊び心」、新潮文庫)と言われるような、外国語に関する少なからぬ実態もある。受験の弊害だとか、翻訳中心の英語授業だの意見があるが、ここで論じるのが目的ではない。

話は変わるが、この諺の意味することの必要性は認めながらも、ボラッチョ・ボニート氏はこの諺が余り好きでない。「七重八重花は咲けども山吹のみの一つだになきぞ悲しき」(醍醐天皇の皇子兼明親王、後拾遺和歌集)と言う和歌があるが、この歌とこの諺が頭の思考回路の中で、ショートしてしまうからである。

大田道灌の故事によれば、歌の本意は後段で、「雨の日に蓑も無い事を言い表して」いるが、私は勝手に、「実の無い」と歌心も無く現実風に解釈している。

すなわち、世の中には、上記の諺と裏腹な、日当たりの良い近道を要領良く通り、八重咲きの山吹のように一見派手に見えても実態は、実の無い見掛け倒しの人がいる反面、日の当たらないところで、一所懸命努力しても、報われることが少ない人が多すぎるからである。

話が横道にそれ過ぎた。軌道修正を図ろう。私は、横文字文化圏の人が他の横文字を習うのと異なって、我々が横文字に弱いのは、縦文字文化圏に所属しているからだ勝手な理由を付けているが、どんな理由をつけて下手さ加減を正当化しても、それは、「ごまめの歯軋り、メダカのつぶやき」と言われてしまうだろう。

何、「メダカの子つぶやき? そんな言葉は聞いたことがありません!」当然です。私の勝手な語呂合わせの造語です。

赤ん坊がどんな国の言葉でも自然に覚え込むように、また子どもの様に無邪気な気持で外国人に接することは、外国語に親しむことへの近道だと思うが、その当り前のようなことが、なかなか難しく実行できないのも確かである。

俗な言い方で世間に広まっているものに、“外国語をマスターするには、その国の女性と仲良くなるのがてっとり早い”と言うのがある。少々屁理屈をこねると、この条件には、「鶏と卵の論」にも似ているところがあって、「彼女が出来たから外国語が上手になったのか、外国語が上手だから彼女が出来たのか」は分からないところがあるのも、理論の信憑性を疑うところである。

さらには人間の感情という不確定な要素があるからなおさらである。残念ながら、私自身はその様な経験がないので真意の程は定かでないが、一向に効果の上がらない人もいる半面、効果のあることは確かであろうという、状況証拠は過去の例だが、周囲に幾つか散見された。

他人、特に異性の前では自分を良く見せようとの本能的なものの働きが、一所懸命練習するのを加速させ

ることもあるだろうし、一対一のマンツーマン(マンツウーマン?)による会話の機会が多いことも一つの要因だろう。なにかの機会が有ったら実行して、理論と実際を自ら検証して見るのも、正確性を重んじる技術者としての役割だろうかなどと、勝手に正当化して、お叱りを受けそうなことを考えたこともあった。お前の面と年齢を考えろ！

結局の所語学の勉強は、特別な才能のある人以外は、我々凡人クラスは、タイトルの意味しているように、毎日こつこつと努力を積み重ねるしか方法がないのだろうか。「短足な日本人が短期間で長足の進歩を遂げる……(ことはない)」という矛盾と苦渋の言葉が、腹の底から出てくるのであった。

(No.53) (観光地のツアーで同行した各国の人と交流して考えさせられました。2007年5月29日)

「ちょっと休憩」

・No hay atajo sin trabajo

これはギリシャの哲学者で数学者でもあった、Euclides (ユークリッド) が数学の弟子(ギリシャの王様だとか、いろいろ諸説あり)に対して、数学を学ぶ上での心構えについて論じた言葉だという。